

令和7年度 赤穂市認知症地域支援推進員活動報告

- 1 認知症地域支援推進員 6名(専任1名、兼任5名)
- 2 認知症地域支援推進員の役割
 - (1)認知症初期集中支援事業の推進
 - (2)認知症サポーター養成の推進
 - (3)チームオレンジの設置及び支援
 - (4)オレンジカフェ(認知症カフェ)の設置及び支援
 - (5)認知症ケアパスの作成及び活用
 - (6)若年性認知症の人と家族の支援

報告者氏名 折原 和彦

赤穂市認知症施策全体図

・皆で認知症を理解し、皆で備える(共生社会の実現)

- ◇気づく 家族、民生委員、住民、在宅介護支援センター、警察等からの情報
- ◇つなぐ ケアマネジャー、リハビリ専門職、福祉事務所等との情報共有
- ◇支える チームオレンジ、オレンジカフェ、福祉・医療・介護等の多職種連携

・フレイル予防で認知症予防・・・フレイル予防の切り札「え・こ・う・し」が合言葉

- ◇えこうし運動(栄養・口腔・運動・社会参加の頭文字)



チームオレンジ その設置・運営・育成

- ◇認知症基本法を受けて地域共生社会・認知症バリアフリーの実現
- ◇少子高齢化の社会情勢に対応し、チームによる一体的支援の開始
- ・いきいき百歳体操やオレンジカフェなど支え合い活動の活発化
- ・通いの場を拠点に3つの「チームオレンジ」誕生
- ・チームオレンジ連絡会(2ヶ月に1回)による定期的な情報交換
- ・チームオレンジの連携による世界アルツハイマーデーでの啓発
(イオン赤穂店でのアルツハイマーデーの啓発イベント 9月21日)
- * 認知症サポーター養成講座、パネル展示による啓発など
(図書館での認知症に関する書籍の企画展示 9月月間)

◇天神山チームオレンジ◇

設置 赤穂市折方天神山地区(天神山集会所)令和4年12月設置

運営 いきいき百歳体操実施団体 約30人 スタッフは約10人

概要 赤穂市西部、折方地域の天神山地区

- ・昭和40年代、塩田跡地に大手電機会社工場が立地、阪神地区の同じ電機会社の多くの従業員が転勤し、発展した地区
- ・国道250号沿いの小高い丘が宅地造成され、坂道に一軒家が並ぶ住宅街
- ・住民は、働き盛りの人が、ほぼ同時期に転入し、順々に定年を迎えている。
- ・そのため、高齢化率は、市の高齢化率34.9%(R7.12末)より、約20%高い。
- ・高齢者を孤立させない取組みのため、純喫茶「天神さん」を開設している。
- ・毎月一回、集会所で独居や高齢者夫婦を招待し、体操、脳トレ、誕生会、認知症についての講座なども実施し社会・地域交流に取りくんでいる。

◇チームオレンジ うみ・かふえ◇

設置 赤穂市坂越東之町地区(坂越防災交流館)令和4年12月設置

運営 いきいき百歳体操実施団体 約30人 スタッフは約10人

概要 赤穂市南部、坂越地域の坂越ふるさと海岸に防災交流館は立地

- ・北前船の風待港、近くの高台の大避神社からの瀬戸内海の渚は絶景
- ・港に続く石畳の街並みに造り酒屋や古民家活用の喫茶、商店が並ぶ。
- ・毎週日曜日、いきいき百歳体操とコーヒー、パンなど軽食で交流
- ・また、最終日曜日は、スタッフやボランティアの音楽会、演劇なども実施
- ・オレンジカフェ(認知症カフェ)も開催し、認知症講座なども行っている。
- ・参加者には、100歳の女性もおり、自分で交流館まで歩いてくる。
- ・参加者は、坂越地域のみならず、地域外や市外参加者もある。
- ・いきいき百歳体操に来ない人には、見守りや参加の声掛けを継続実施

◇千種ハイランドチームオレンジ◇

設置 赤穂市木津千種ハイランド地区(千種集会所)令和6年10月設置

運営 地域福祉活動に熱心な人による運営 約20人 スタッフは約5人

概要 赤穂市東部、木津地区の千種ハイランドで活動している。

- ・清流千種川の西側の丘陵地が宅地開発された地域である。
- ・ロクハウス等の建築が可能で、全国から転入者があり、市内や近隣都市に親戚のない世帯も多い一方で、隣近所の助け合いなども見られる。
- ・地区全体に急坂が多く、店舗もなく、買物や移動手段の確保が課題である。
- ・住民の交流拠点の千種集会所が地区の中心部にあり、いきいき百歳体操、カラオケ、料理教室などが、熱心に行われている。
- ・また、チームオレンジが自治会からの補助金の対象となる地域活動団体として、千種自治会に要録された。

◇チームオレンジに期待できること(メリット)◇

チームオレンジのある地域にとって

- ・見守り活動や支援で地域の新しい絆が生まれる。
- ・認知症や軽度認知障害の人が地域で長く生活できる。

オレンジメンバー(支え・支えられる人)にとって

- ・自分達の活動が社会に貢献しているという実感がある。
- ・活動による新しい仲間づくりや健康維持と増進が図れる。

地域社会全体にとって

- ・ゆるやかに支え合うチームで高齢社会を乗り切る。
- ・そのチームをモデルとして深め、広げていく。

◇これからの思いと展望◇

- * 認知症は、長寿社会では避けて通れない社会課題といえます。
- * 長寿社会では、「支え・支えられる」が地域づくりのポイントです。
- * そのため、お互いを支え合う「認知症サポーター」のエネルギーの結晶として「チームオレンジ」の育成・支援が大切です。
- * 認知症サポーターのシンボル色であるオレンジは「手助けします」という意味があり、「チームオレンジ」は、活動のエネルギーを感じる快い響きを感じられます。
- * 「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」の理念に沿った「チームオレンジ」を手段として今と未来をともに創っていきます。